酒井健吉 —— 狂想的司伴樂第一番 ～ボーカロイドと室内管絃樂の爲の～【初演】

この度の作品はボーカロイドと室内管弦楽のための作品でボーカロイドを実演で使用した現代作品として国内では恐らく冨田勲氏のイーハトーヴ交響曲に次ぐものだと思われます。（多分。。恐らく。。。）
タイトルに「司伴樂」（しはんがく・しばんがく）なる言葉が使用されていますが、これは明治大正の時代に使われていた現代で言うところの協奏曲と同じ意味を持つ言葉であります。ボーカロイドは仕事の都合で使うようになりましたが、なぜ私がこのような作品を書こうとしたかともうしますと、フランスの作曲家オリヴィエ・メシアンが1948年に当時最新の電子楽器であったオンド・マルトゥノを使用したトゥランガリラ交響曲を発表したことを思うと現代音楽の作曲家の必然としてこの作品を書かなければならないと強く思うようになってきました。そして今日の機会に発表することになりました。本当に機会を与えてくださったフィル長とその仲間たちに感謝するばかりです。作品は次の七つの楽章からなります。

第一楽章「AMA・WATA・DAMA」（詩・酒井健吉）
この楽章の作詩は恥ずかしながら私（作曲者）に依るもの。使っている言葉はなんと縄文時代の言葉なんです。縄文人が現代でも生きているわけではないので此処で使われている言葉は考古学者たちが様々な要素を用いて復元したものです。最初に繰り返される「Ama Wata Dama」と繰り返される言葉は「空・海・山」という意味の言葉で当時からあったであろう自然信仰（アニミズム）をあらわしています。

第二楽章「水の姿」（詩・吉行理恵）
此処では水の持つ曖昧さを表現するために普通の調性を使うのではなく12音の無調で書かれています。

第三楽章「月光でといだ氷の刃」（詩・銀色夏生）
皆さんは誰でも月にうさぎがいたころがあったと思います。この楽章は自分の子供を見ていて、そんな頃を思い出しながら書きました。間奏部分はうさぎの餅つきといったところでしょうか。

第四楽章「間奏曲」
此処ではボーカロイドは登場しません。室内オーケストラのみに依る無調で原初的な音楽をお聴きいただければと存じます。

第五楽章「わだつみのこひ」（詩・木部与巴仁）
2008年に初演した久留米出身の画家・青木繁の人生とその絵画を題材とした室内楽劇「海の幸」からの抜粋による楽章。この「わだつみのこひ」は古事記に登場する海幸彦と山幸彦のお話で山幸彦と豊玉姫の恋を描いています。

第六楽章「百千の」（詩・伊東静雄）
詩は私の地元である諫早出身の詩人・伊東静雄氏のもの。おそらく伊東氏の詩が歌曲となったのは初めてのことだと思います。今年で没後六十年。もっともっと付曲していきたい詩人です。

第七楽章「雨音」（詩・Kana）
この楽章は詩が音楽を運んできてくれたと言って良いでしょう。作詩をされたのはフィル長のチェロの方で2011年より共同作業をさせていただいております。今回も私の意図をよく読み取り素敵な詩をご提供いただきました。さて、スイングする律動に乗って雨が止むのを待ちましょうか。。。（作曲者）